

1. 縄文時代前期の石棒について

能登 健

荒砥上ノ坊遺跡の1区72号住居から出土した石棒は、縄文時代前期の諸磯b式期のものであった。

従来、石棒は中期になって出土することが、およそその定説になっていた。しかし、^{註1}昭和51年に前中原遺跡(月夜野町)で前期と考えられる小型の石棒が出土したこと为契机として、前期の石棒に注目されだした。群馬県では、ここ十年の間にわたって前期の石棒の出土例が漸次増加している(第4表)。その結果、群馬県下では明らかに前期に属する石棒が分布することが確定的になっている。以下、管見に触れたものについての主な形態的な特徴を述べる。

前中原遺跡例(第156図-1) 長さ10.7cmの黒色頁岩の細長い自然石製である。丸みを帯びた一端を頭部にみたてて刻線を巡らして小型の石棒をつくりだしている。もう一方の端部には、原石採取以前の剥離痕跡があるが、石棒製作時に敲打による調整を加えていることから、完形であると考えられよう。

遺物包含層からの出土であり、花積下層式土器や黒浜式土器を中心とする前期前半の土器群と共に伴した。

荒砥上ノ坊遺跡例(第156図-2) 頭部は二本の刻線で表現されている。住居址内から出土している。体部にある剥離痕は自然のものではなく、人為的な敲打によるものである。この敲打痕は、陣場遺跡の凹み穴や行田I遺跡のうっすらとした凹みとあわせて、意識的な造作と思われる。

^{註3}

陣場遺跡例(第156図-3) 頭部は二本の刻線で表現されているが、刻線部分を削り込むことによって突帯をつくりだしている。上端面はやや平らになっている。下端部に縦の浅い刻線があるが、人為的であるかは確証が得られない。体部には、明らかに人為的にあけられた二つの凹み穴がある。

^{註4}

註1 「日本原始美術」1(講談社; 1964)の「先史時代概説付表」、大矢昌彦「石棒の基礎的研究」(『長野県考古学会誌』28 1977)、山本暉久「石棒」(『縄文文化の研究』9 1983)などがある。

註2 群馬県埋蔵文化財調査事業団『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』1982

註3 本報告書掲載。

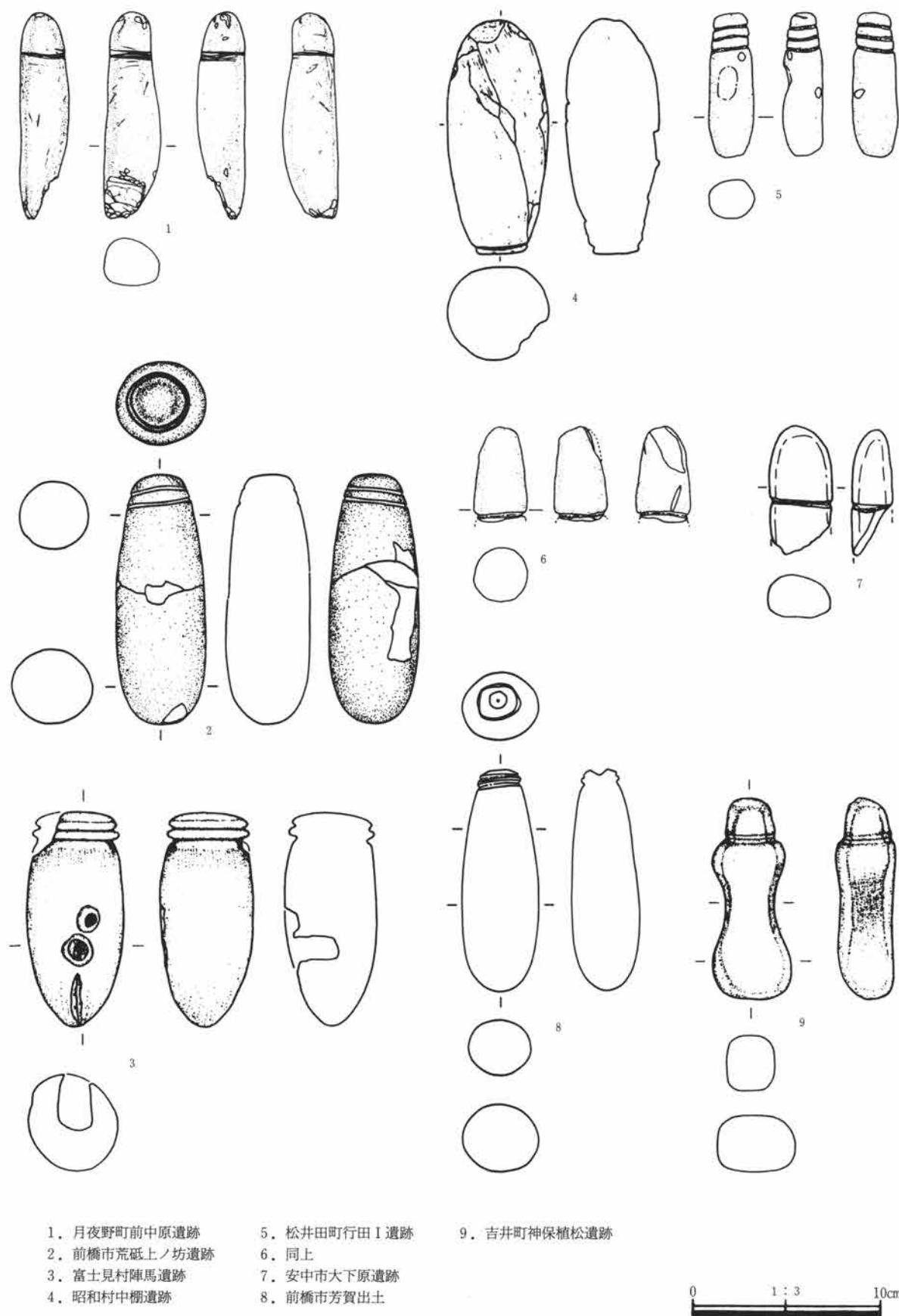
註4 羽鳥政彦・藤巻幸男「新発見の縄文時代前期の呪術具二例」『群馬文化』220号 1989

第4表 群馬県出土の縄文時代前期の石棒一覧

番号	出土 遺跡	時期	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	月夜野町前中原遺跡	前期	黒色頁岩	10.7	2.7		125
2	前橋市荒砥上ノ坊遺跡	諸磯b	流紋岩質凝灰岩	13.2	4.7	4.4	173
3	富士見村陣場遺跡	諸磯c	灰白色凝灰岩	11.2	5.2		
4	昭和村中棚遺跡	早~前期	緑色凝灰岩	12.6	5.4		241
5	松井田町行田I遺跡	諸磯b	珪藻土	7.4	2.4		18.1
6	松井田町行田I遺跡	諸磯b	珪藻土	(欠損)	2.8		22.2
7	安中市大下原遺跡	前期	結晶片岩	(欠損)	3.5	2.2	
8	前橋市端気町芳賀地区	?	流紋岩	11.5	4.5		
9	吉井町神保植松遺跡	諸磯b	牛伏砂岩	11.5			

第5表 群馬県出土の石冠状石製品一覧

番号	出土 遺跡	時期	石 材	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
10	新里村城遺跡	諸磯b	軽石	3.3	5.7	4.8	
11	柏川村長田D遺跡	諸磯b	安山岩	8.2	4.7	3.85	127.9



第156図 群馬県出土の縄文時代前期の石棒

1. 縄文時代前期の石棒について

中棚遺跡例(第156図-4) 頭部は一本の刻線を巡らせている。上端面は平らになっているために、報告者はこの部分を下端として図化している。体部の凹みは人為的であるとの確証は得られない。^{註5}

行田I遺跡例(第156図-5・6) 2例の出土である。ひとつは完形で、3本の刻線で頭部を表現している。ほかの例にくらべてやや小ぶりで稚拙なつくりになっているが、荒砥上ノ坊遺跡例と同型であろうと思われる。体部には楕円形のうっすらとした凹みがみられる。もうひとつは、頭部のみの欠損品であり残存長4.9cm、全体像は不明であるが、やはり刻線で頭部を表現している。^{註6}

大下原遺跡例(第156図-7) 明確な小型の石棒が一点のみ出土している。頭部端のみの欠損品で、残存長は6.6cmである。石材が結晶片岩の自然礫であり、その特性から偏平なものになっている。1本の刻線を巡らせて頭部を表現している。なお、本遺跡からは、長さ18.1cm・最大幅5.9cm・最大厚4.7cm・重さ814.6gと、長さ63.9cm・最大幅16.4cm・最大厚15.8cm・重さ28.5gの結晶片岩製の石棒状の石製品が2点ほど出土している。前者は敲打、後者は研磨による調整が加えられているほかに石棒特有の表現はないが、報告者は石棒として記載している。前者は住居の覆土から土器片などとともに廃棄された状態で出土し、後者は土坑墓の墓標と思われる出土状態を示している。どちらも前期だとするが、ここでは前期の石棒として採録しなかった。このほかに、

「棒状礫」と称される結晶片岩の自然礫19点が報告されている。

^{註7}

前橋市芳賀出土例(第156図-8) 頭部は2本の刻線を巡らせている。体部には打ち欠きによって付けられた剝離状の凹みがある。個人の表採品で、未報告資料である。芳賀一帯は前期の集落遺跡であることから、帰属時期はおそらく前期であろう。現在、本資料は前橋市教育委員会が保管している。

神保植松遺跡例(第156図-9) 長さ11.5cmの棒状の砂岩を加工したもので、報告者は岩偶としつつも石棒に類似していると記載している。断面が偏平で、体部にくびれがみされることから、ほかの石棒とは明らかに形態が異なっている。しかし、報告者の注視とともに一応石棒の可能性も含めて採録しておく。

^{註8}

^{註5} 昭和村教育委員会他
『中棚遺跡』1985

^{註6} 長井正欣「行田I遺跡出土の遺物について」「群馬文化」220号 1989

^{註7} 安中市教育委員会『大下原遺跡・吉田原遺跡』1993

^{註8} 註4と同じ

前期石棒の特徴

前期石棒には、形態上でいくつかのバラエティーがみられる。このうち、もっともポピュラーな形態は荒砥上ノ坊例や陣場例に代表される形態であろう。いわゆる泥岩系の柔らかい石を好んで選んでおり、一端に刻線を加えることによって頭部を意識させる造形意識も共通している。あきらかに、すでに型式を意識したものになっている。

これらの石棒は、円礫を削り出して造形されているが、前中原例は自然礫の一端を刻線によって頭部にしている。この形態は、群馬県下の出土例の中では特異例となっている。しかし、東京都田中谷戸遺跡で早期条痕文土器に伴出した石棒例とは形態的に近似していることから、類例をまってひとつの型式として認知できる可能性もある。

なお、神保植松例は、岩偶の可能性を考慮しつつも、ここでは石棒の一形態として

^{註9} 町田市田中谷戸遺跡調査会『町田市田中谷戸遺跡』1976

認識しておいた。

凹み穴について

筆者は、かつて石棒に付いている凹み穴について、女性原理を表現したものである

註10 能登 健「信仰儀礼に
かかわる遺物(1)」「神道考古
学講座」第1巻 1981

との見解を示したことがある。この見解は、中期の石棒についてのものであったが、
註10今回集成した前期の石棒のなかにも、同様な「凹み穴」例がある。おそらく、これらの

「凹み穴」や、それに類する「凹み穴状の表現」も、女性原理を表したものであろ

う。

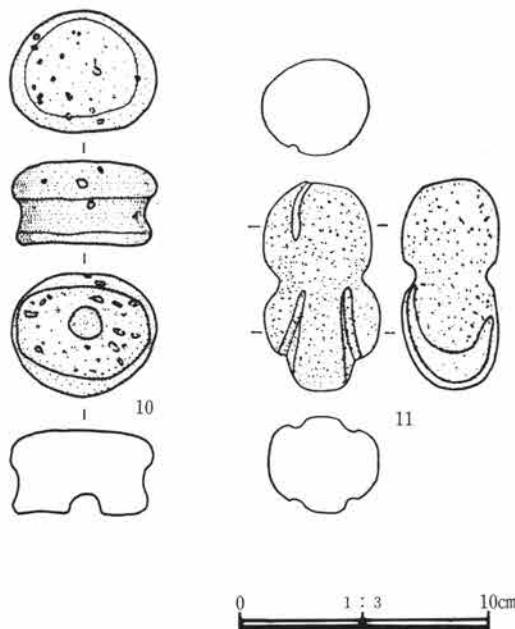
ところで、赤城山南麓にある2遺跡から、興味ある石製品が出土している。ひとつは、城遺跡から出土した軽石製品で、上半部が石棒の頭部で、下半に凹み穴が付いて

註11 新里村教育委員会『武
井・城遺跡』1981

いる。とともに、諸磯b式土器の包含層から出土している。また、もうひとつは、月田・
註11室沢遺跡群長田D遺跡から出土したもので、安山岩製である。これも上半が石棒の頭
註12部になっている。下半については、見解の相違もあるが、筆者は女性性器と考えた

い。諸磯b式の住居址内の出土である。

どちらも、その造形構造は石冠と同じで、男性原理と女性原理の結合した呪術具と思われる。これらの遺物の出土例からも、前期の石棒に付けられた凹み穴が女性原理である蓋然性は高いものと考えたい。



10. 新里村城遺跡
11. 粕川村長田D遺跡

第157図 群馬県の縄文時代前期の石冠状石製品